



主從心得草

九編下

□ 9
3457
7止



9
8457

鳥藏

書田

主従心得草五編下 目録

人事をつくとて天命を待より外小安心の道ありき事初丁

天小事と能身をおとめ。死を俟仁の至りとりふ事 二丁

死生命在り富貴天小ありとりふ事 四丁

社の糞のやせ米藏の鼠の肥あり居所も大事とりふ事 五丁

立身出世せんと思ふ人の晝夜修む事 六丁

君子の災ひ来る思ふに福来共ありとむ事 七丁

天子より庶人小至る逆身を脩むるを本とむる事 八丁

其道を尽きて災難小逢ふ業因縁天命の事 九丁

主人の笑ふゆゑも家のよく治まる為ふ事 十四丁

三徳心得五編下

初丁

鳥藏

一 何所の主人も十分ふよき。家来をやりがらる事 十六丁

一 十能六藝あつて。十人前も。九人前も。用ふ立男の事 十七丁

一 初めつを伊勢やの前を直通り此事 九一丁

一 私か主人へ。無理か人むつとまりませぬとりふ事 九四丁

一 主人の非道ふくまると。忠義を尽きて出世する人の事

一 伊勢屋吉兵衛へ。町人の英雄別家五十三軒の事

一 主人の御側をつとむる武士心得の事 三十七丁

一 佃又右衛門とりふ大剛の武士。大忠返答の事 三十八丁



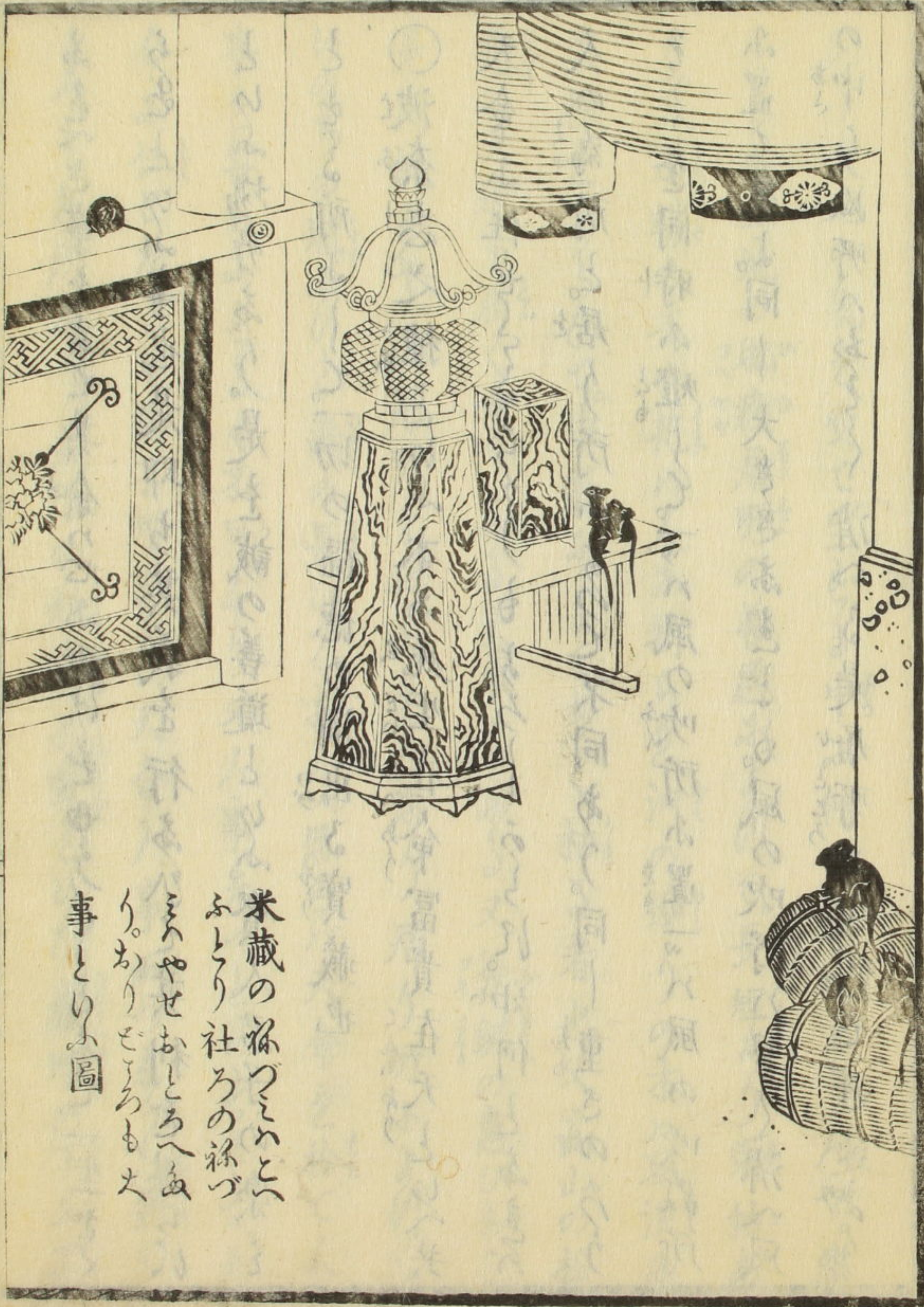
主従心得草五編下

○又主従ハ各別ハ心得る所もあり。又主従一致ハ心得る所もあつて。一かいぬハ思ふやうに。時所ふよつて。返得あるべし。又家来の者ハ。主を主。家来ハ家来と。急度格別ハ心得べし。主ハ家来を主と思へとりふ事ハ。主君たる者の心得を申す。逆ハ主と。家来たる者の決して思ふことぬ。あつてとあるべし。家来ハ主人の仁不仁かまはさず。只忠義一途ハ主用をつとむる。主人の無理非道。盲目か。海を。己もか。か。とむべき事を急度つとめて。一生を送る。其心めて。か。とめあは。天道より。福德をあへる。

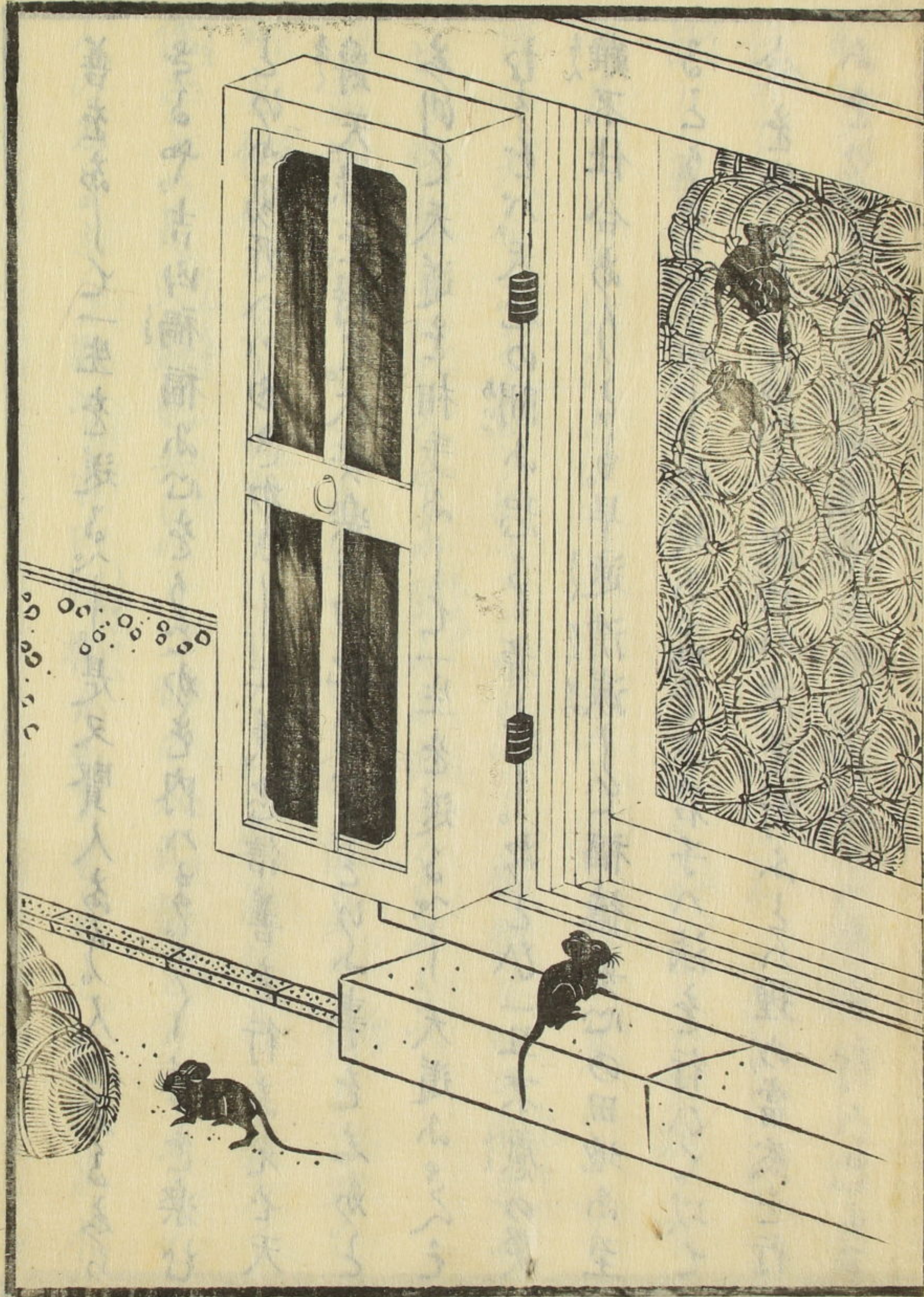
事うごかひあり。鬼角とくく天ふあうまくと居るを。樂ことまべし。
 何れどの大智者たでも大學者だでも天命ふ背そむきて天より
 罰ばつしあふ時ハ。是をのがる事ハありか。貴賤上下
 智愚をいふは。ひといせぬふあふとあるべし。是ふよのそ
 佛神天命ふともむぬやうふまべし。福德安心の根本也。
 一切の福德安心ハ天命ふ随まふありとあるべし。

○孟子のいふごとく。天ふ事へて。而ち能身を脩おさめて以て
 死を俟まち仁の至り也と。又いふごとく仁義忠信善を樂んで
 倦うまざるハ是天爵也共いへり。一切の人此語をよくあうりて
 人のあるあうぬや。吉凶禍福ふあまらむと。仁義忠信

善をありて一生を送るべし。是又賢人あり。人のあるあら
 ざるや。吉凶禍福ふ心をうごめを内ハまごく善を樂む
 とりの場所へハゆきか。仁義忠信善を行あえを天
 爵た天録てんろくを得て。大安樂の田地ふ至るといふ事をあめと
 ありて。天道を相手ありて一生を送るべし。天道ふとそ
 むらむバ。天地の間あいでふ恐る者あり。たとひ一旦不慮ふりの災
 難なん不仕合ありとも。早速消滅そくしょうめつして福德安心の田地ふ至
 るところとがひあり。此故ふ孟子ふ君子ハ法を行ひて以て
 命を待のこといへり。此心ハ法を行ふとハ理の當然を行
 ふをいふ君子ハ吉凶禍福ふあまらむと。善を行ひ己まら



米蔵の祿つとらへ
 ふとら社ろの祿つ
 んやせふとらへ
 り。ありまも大
 事といふ圖



あまをべき事をあて其余ハ心ふゆけむゆりくとあて一生をくらをとりふ事也。是即ち其義を行ふひて其利を謀らばとりの場所あり。是を誠の善道とりの。賢人君子の樂ととまる所ありて一切の福德の涌出る寶藏也

○波奈志之種とりの本ふ死生在命富貴在天とりの共天命ふ任せざるむりもよろい。如何とあまふ人の為所と。居り所ふよつて不同あり。同一重さのりりそくを同時ふ燈して。一ハ風の吹所ふ置一ハ風の吹ぬ所ふ置て見よ。同一大きさまども。風の吹所ハ早く消へ風の中らぬ所ハあそく消へる。是居所ふよつて遅速あり

同一天地の氣を受けて生むる中ふ何を長短あるんや。然るも土地の肥瘦居所の善悪ふよつて長短あり榮枯あり。又道端の木の花ハ人ふ折らば河の邊りの木ハ風浪ハ其根をあらしひて。中道ありて。多く枯る者也。又高山の松捨ハ天道も届く中りある大木とある又斧鋸の患ハあしは何故ぞや。其居所を得たまをあり。居り所ふよつてりのちの短めいと壽の長いとあり。然るも天命を捨て人事を専らふまざるも不可あり又人事をつとめむして。天命ふ任せたるも猶不可あり。天命人事兩つあがら無てよろい所あり。孟子の妖壽不貳とりの。巖墻の下ふ不

○朝おきハ家を福とせぬ心がけ。暑さ寒さも身ををいくふふと。何分ぬも。人事家業を出情あつつとむべい。家業ハ大骨を折大苦勞を致し。夜あらいをあこまむとて。朝寝昼寐をまるやりハ機根めてと。立身出世ハ出来がこし。役ハ立ぬ人とあるべい。立身出世をせんと思ふ人ハ晝夜移ぐつとめ働くをいふ。又武藝學問何藝。何事ハあらじだ。人ハ勝まんと思ふ人と。晝夜福を鍛練ますべい。本より上ニある上ハ又各別ハ修行せむといふ。誠の效ハ致りあらず。

何事ハあらじむよく熟せむ。垢のぬけぬ内ハ名人といひかこ。こもふよのてよく熟あて垢のぬけたる人とあるをいふ。人より出世せん。人ハ勝まんと思ふ人ハ晝夜福を鍛練ますべい。家業藝能を出精鍛練ますべい。何事も不機根不精。あらじ立身出世ハ出来がこし。暑さ寒さをいくとむむ。出精ますべい。譽を揚ん事疑ひあらず。

○古語ぬらむく。君子の道ハ己をあらむを貴しといふ。身の安きを以て富といふ。故ハあらじあり。位録を見ても。其心ららむ患難ハ逢ても其操を変ぢむ。唯理義の自然ハ順がつてあらずあり。是を真の富貴といふ。又家語一ハ君

子災身ひ至る恐まじ。福来まじともよろらむとあり。此
心大入用智ある人の此所み心を落付て吉凶禍福をくへり
るを。唯一向み善をあまべ。終めハ福德安心の田地みりこ
るあり。古徳の哥み○我らら常盤の松み似たりり。世
のよーありみ色をぬえ福をと。かやみ心得たるを君子
操とりふ。此道理をよくまると至善み止まりて。安心み世
を送る愈一

○大学みいりく。天子より庶人み至るまじ。壹み是身を
脩むるを以て本と為。其本乱まじ未治まる者ハ否ず。其
厚くまる所の者ハ薄くまじ。其薄くまる所の者ハ厚き

こと未だらまありとあり。此心ハ壹つとん一切と同一と
あり。貴賤上下押あべとりふ事あり。上ハ八條目を委く
説て其中あり。肝要の一ツをあけ。誠意正心格物致知を
皆身を脩むるが為あり。上天子より下庶人のいやま
者み至る迫押あべ。皆身を脩むるを以て根本とまる
事也。此故み其本乱まじ未治るハありとあり。家國天
下を治むるも身持が根本あり。身をよく治め家國
天下を平治まるあり。然らば身ハ本み家國天下ハ
末あり。家内ハ親を厚くまる所の者あり。国天下を
薄くまる所の者あり。そこで身をよくあまめ家内の親

これを厚くして。家をよくするのへ其上めて國と天下の薄くする所へ推及おおよが事あり。然るも肝心の本とまざる所の身が治まらざらば。其本が乱みだる居るうらまえて。家をよくするの國を治め天下を平らふ事ハ。決くだして出来がたしとりふ事あり。是よつて先身をよく治め親孝行を尽つす。兄あにをらやまひ身をあまそと。家内の者と親を厚くして。家をよくするのへ。夫らう一家一門と和合わごうあり。國天下を治むるあり。まらざるも身を脩めを親子兄弟一家一門を薄くして。不和あらむを薄くする所の國天下ハ。弥々薄くあつて治むるうらまえて出来がたしとあり。

然らば身を脩むるハ根本あり。家國天下を治むる事ハ。未まあり。此故に上天子より下万民の賤き者に至るまで。壹ひとおへて身おさむるを以て本とまると仰せらるなり。其本が乱みだる居てハ。未の治まる道理ハあき筈あり。上天子より下万民に至る迄。身をおさむるが善事の根本こんぽんあり。諸道成就の所あり。若身をあさめをまてハ。家も國も天下も治まりがたし。身をおさむるハ根本こんぽんあり。其外ハ皆枝葉あり。何れもめぐるも。身をよくあさむるを第一とまべし。是を本をまるといふ。是を本をつとむるといふ。福德安心を願ねがはむとて来るべし。若身を治めむとてハ。國家を失ひ先ま

祖の大切を空しく致し。妻子眷属を路頭迷せ大難
義をぬける事。悪事の中の大悪事あり。何卒一切善根
の根本たる身をよくおさめ。妻子けんごくを安泰ふや
まふべし。是れ目出度人とりふべし

○孟子ふり多く其道を盡して死する者の正命也と註
み其道を尽まじく。身をよくおさむる事あり。身をよ
くおさめ道を尽したる上あり。災難ふあふて。死する
も正命あり。身をよくおさめをて災難ふあふて死を命と
邪命あり。又孟子ふり多く君子の守りし其身を脩め
て天下平うありと。註ふ君子の守る所の身をよくおさむる

を以て要とす。よく其身をおさむる時ハ家よく齊ひ
國よく治まりて天下平うあり。何れを所順ふとて。及
ぶ所おさむるあり。是守る慶約ありて。何れを慶ひら
きあり。身をよくおさむる時ハ。万事よくととのひを
天下迄平うふあり然らば身をよくおさむるハ。一切善事
の根本あり此故ふ人々先身をよくおさめて。一切善事乃
本をつとむべし。福德安心ハ願ふとて。澤山ふ来るべし
此故ふ上天子あり下万民ふ至る迄身をよくおさむるを以て
本とすとのむべし。ありかたきをへあり慎んで拜
受まべし。哥ふ○あはるるとハ身をまゐるのがまゐるあり。

身をまもらぬは神もまもらぬと是非間違ひあり。心の
何れと清淨善心でも身を守り慎まざるは於ては
禍わざはひひ即座すなはちみ来つて罪科ざいこそのがまがごとし。此時み至つて
は。神も守り玉ふは是非共ともみ身みの亡ぶ危し。人々この
事をよく志つて。急度きうと身をおさめ玉へ。福德の来る大
道みちあり。

○論語も其身正ただくして。天下平たいへんく也とあり。是非相
違あり。四書五經其外の末書等まうまうとうみ至る迄。皆是身を
おさめ玉ふのつを説とくたる者あり。慎しんこら玉ふは身をよく
おさめ玉ふ。天爵てんじやく天禄てんろくを得え玉ふべし。世間の放蕩ほうたう者共此こゝ儀を

深く志つて。是非あり心を取直とくし身をよくおさめ玉ふ。家業を
出精しゆしやうりし家をととのへ。世の中を安心あんしんかくら玉ふべし。是
を誠まことの樂たのしみとていふ。大酒たいしゆ女郎ぢやうらう買かひ拵ぢう山さんおどりを樂たのしみとて思ふ
は。狂乱きやうらんの甚しきあり。智者の眼めより見る時ハ身をまら
はし。家を失ふの道みちあり。大苦たいくあるの最上さいじやうあり。大たいひふ
恐おそる事あり。然るを樂たのしみと思ふは馬鹿ばかの嶺平りやうへい狐きつね付つの大
将しやうあり。此上の狂乱きやうらんある危あやし。此事をよく志つて。正
氣せいみあるべし。何れも大聖孔子孟子の教へよとてかひ。四書
五經ごけいよよめし行なふ危し。又家業かぎみひまある者へよとて心
學がくのめよ本を見し。心をあらため身をよく脩おこむべし。身を



十人も廿人前もすくくらきの
のちるまことの圖

よくあきむまは。天禄を得て世の中を安心みくらもあくと
らさかひあり。若聖人智者の教へふよろむと。私一乃
簡を以て行あふ人の其余らるふたうに。無智の人と定
め置る。

○又上たる者へ。家来下々の者共の難儀あはらぬやうにい
た。追て出世するやうなまべ。我子や孫のひいきをくり
せむと。家来下々のひいきを致まべ。日月の草木国土を
照しぬふがごとく。依怙ひいきあく真直み計らふじ。
古文真宝み大明み私照あり。至公み私親ありとあり。上
立人への常み日光の世界を普く照し一物も私み照さ

仁徳を廣くやどらして。万民を守護まべ。宮中侍女の輩迄も。假し私み愛し親む事ありと
りふ事あり。古人のいふ。形直くと影曲らむ。其政と
正ありと。國乱むとの間違あり。天下万民み依怙ひいき
あり。仁徳をやどらまべ。然りとしへ共下々の不機根
と。唯うまひ物をくいたがり。擬ふ事むらりを好む者あり。
是れいままむべ。御家の御用。御国の御用。天下の御用
へ用捨よく使ふべ。雨雪寒暑昼夜のよろあく。使
し。左様あくと御用ゆけて國家へ治りかこ。勤めと
らく事へちひ。又下の者へ御主人の御用を

よくつとむべし。生皮不氣根めとの相濟不申候主人のため
 小もつとつとと思ふの大間違ひとが飯をくふ為のものこ
 らきあり。是より依て御主人の御用を晝夜つとむべし。
 終ぬの出世まべし。生皮者八人の邪よゆまをた。大きふと
 ろし終ぬの貪びん走がうあんぎまるとあり。是天の御定め也。是ふ
 よつと出精して。主人の御用をつとむべし。あんがうはよい
 人であくといふ福德あり。柔和めして。上の者ふよくあつと
 ふ人であくといふ。よい人といひひがこし。孟子も堯舜の道
 へ。孝悌而已と仰せらまたり。是上ふよくあつとがとま
 也。善良の人といひひがこし。

○又主人たる者の家のよく治まる事を樂とまむ
 し。いづるも笑ふも家の為ふまべし。我身の得手勝手ゆづ怒
 りたり笑ふたりまべし。只家の為ふある事を第一と
 まべし。手代小者てしろふ至る迄。ろくあや川の一人もあし。ろ
 くあや川のあけまども。夫をほとあるやうふして。ほとあ
 させるか主人の慈悲あり。いづる人ふあるやうふ使ふを
 し。未の店持家持とあるやうふ致まべし。越度あちどあつと。ま
 ろり又の異見をして。押直おしして使ふべし。其人を追出
 して。外の人を使ふ共。又同どく役ふ立まあまを先と元
 の人を使ふより勝かつかあるとまひて。堪忍かんじんして使ふを

又よい家来の沢山あるとり物のよい家来のよいもの
 こそある。何もの主人方も此一段の當惑なき難儀と云べし
 ○家語に孔子のいごとく。人の一善を見て百非を忘るる
 の善あるを見て已むとあるがごとし。人の善を軍
 への自わく是を行ふ。而して後人を導くとあり。
 万事この心持ありたり。此より持あき人の上々乃人
 とのいひがごとし。是舊惡を捨て新功をとるの心あり。
 又旧惡を思ふて。新功を捨る人のせましくして仁心あり。
 人の功を押へて人の惡をあつとるとりよりのあり。其人
 の下ぬ前非を悔て功を立る人あり。是人をそとあふと

りよ者あり併し旧善旧惡も勘がて賞罰する事もあるべ
 し。是もあつて叶ふぬ事あり。先ふ不忠不義の罪あつた
 後の大善の賞の火くは扣へてもよろしかりん。又先ふ忠義
 善行あつた後の大惡の罪の滅火する事もあるべし。とこ
 の臨機應變時所のよろきふとあふべし。旧善旧惡を
 考へて賞罰せ給はあつぬ事あり。然るども旧惡を遺根
 ふ思ひ人をそとあふんとするは大惡無慈悲あり。是信
 長公の天下を失ひぬふ由あり。いづとあつても主人の
 家来共の火くの不義不忠を一々咎むべうら。又家来の不賢
 難癖をあつりいふとあつた。其様み吟味せよ。世界中の

使ふ人あり。大体の事ハ省免ちりめんとて使ふべし。あまりこそせくと
 せんぞくまゝの。苛政くわせいもたてて國家を亡やぶまこんやんあり。
 主人の家来共の不義不忠。不骨難癖おんくせを。あまり一々とと咎む
 べうら泥どろとりふ事を。あうとあるべし。主人の敬寛信敏惠けいかんしんみんけいの。
 をこあひありたし

○人の只失あやをとま亂ごさむ徳を去かき。苦くるい。ごらあもそりへあるあり
 ○あしきとて只一筋ひとぢふ捨するあふ。あふうきを見よ。あぬ乾かとある
 ○賢人も越度失義あやとあやぎのありときく。人のあやまち。笑ふべうら泥
 ○誰身たかみあも七ツのくせのありときく。幾度いくばくも身を。へりらるべし
 是等の歌をよく考へて。誰身たかみあもあやまちある事を悟さと

るべし。人のあんく世を一々とと咎むべし。然るも何所の主人
 も十分ふよき人むらりや。先算筆せんざんひつが達者たつやで得意とくい
 先の應對さうたいをよくして。商あきかひもする事が上手うでで。万事利根ばんじりこんで。
 何をあてもよく致し。其上實体そのじやうじたいで。主人の髮月代かみつきよひもよく
 致し。其外小料理そのほかせうり等もよくしらへ。又折まての米もつき。積たか
 もり。とまて無病むびやうで達者たつやで御飯ごはんの火々たべて。よくとら
 く奉公人ほうこうにんが抱かかへたいといふ。主人むらりあり。右之通りみぎの通りの
 十分ふよい人の。大千世界せんぜんせかいを黄金くわんごんの草鞋くさじやで。尋たづねも一人も
 あり。極上ごくじやうのよいとりふ所ところが一得一失いつとくいつしつの人あり。其次ハ皆く
 いつぶりの。何の用もちあも立ぬ人むらり也。見世みよのあきりもの。

かくの房も同ト事也。一切の主人達。其心得めて下人を使ふ者。

○又万能ありて。一心たくぬ人も役ふ立ぬ者也。ある所ふ何をさせても十人前も。九人前もまゐる。よい男あり。よきぬき筆用の勿論。立花蹴鞠歌俳諧何をさせても上手也。又細工事へ人のまゐる事を一寸見ても。やる物也。直み上手ぬ造る。又口をきうせして殿方の前も。をこむと云事一向あり。何をさせても。何所へ出しても。一騎當千の男。百万石が物ハ。どふしてもある男あり。其位ふ利根發明者あり共。兎角身上持がまゐる。て。妻子を養ふ事が出

来まあり。女房子供ぬのりども。きこぬ物をきせ。あどぬい物をくもせとあり。女房のまこらき。今日を漸くとまのどぬ縁。此上の貧乏ハあるべからぬ。或人間てい。貴様もどふ智恵才覚を以て。妻子を養ひ。其やうぬびんがうまゐる。いうある。ありやとい。ぬ。ぬの男谷へてい。私ハ自まんぬぬあけ共。よき書筆用の勿論。其外の藝能も人より上手ぬまゐる。十能六藝何一ツとて。よくせむとらふらとあり。然もともぬぬい事ぬ生と付て。唯ぬらうらうらと提んで居るとか好あり。手も相應ぬわけども。筆取る事がきつぬ嬾

ひ。筭用も相應ふ申了けきども。筭盤を九年も手も取たる事あり。其外の藝能も皆打捨て。旋んでさうり居て手を出も事もしやあり。又朝寝がまきで。晝の四ツふあう後起たる事あり。夜ひの道も起て居て。酒をのそ蕎麥をくひ。人寄をまき。さうりぐ事がまきあり。其くせ油火がきついきうひで。ろろそくさうりをちも。三度の食餌も。沙菜があげまきくへむ。よい物が着たり。うまい物はいたし。第一酒が大好で。毎日くあびるやどのも。其くせ跡引上戸で。管をまき。事がまきで。人のいゆが事があもまろくしてあうぬ。又錢金を見ると。人の物だの。我物たの

りふ差別あく。皆遣ひあく。と。あまも後。氣のままあいい性分で。何でもゆぐも金錢のある内。あのをまのて居てのんで居る。酒があく。あまは。直ふ旋山も出うける。その人ふつき合。まきんを取ま。出世まるとりふ人ふは。合事がまき。いさうひ。其くせ錢もあうぬ事あり。世話まきで。段くと損をまき。又まきい事あり。女とりふと。一人んがけふのろくあり。あまは八尺たり。前後をまき。うてう天とありて。人目も耻も思まぬあり。又あまき者で。見へまき事まきで。氣のまき事あり。まきのいきうひで。人のいふとを火も聞ま。自分の思ふ通りふ

せ給べ。虫が得心せぬ。わづらふ我侘ものあまは。人も憎とて
あまはとて。出世も家業も出来ませぬ。夫故も貧乏致と
といへ。ある人聞て。あるやど何ありはけして。如在あく
功者で發明人た。いとまる手合ふ金銭のあも者
一人もあ。兎角外の事ふ利根でも。身上持が利根ふ
あくと。何あもあらぬ。人中で口利事も出来む。何の
役も立ぬや。川がゆとりも。身をよくあらぬ
家業を出精と。金溜るや。川が一たん利根あり。金さ
へあまをあのづら

御公儀の御法度も宵あぞ御先祖の法事等もよく致

。親孝行も家内和合も。御家もちんあやう。あらぬも
達者で長生と。といふ者あり。あまはの惜い事あや。一器
量ある者あまは。是より心を取直。一持ぎめせい。う林
持ふあり。妻子けんごくを。あ。あひあへといへ。金
と。き物た。先と。きあ事を。く。梅んで居るがよいとい
へ。夫で。貧乏。まる。苦あり。利根と。いひあ。大馬
鹿あり。無藝あり。大ひふあ。と。い。めたり。金
も。け。出来る手もあり。智恵もあ。あ。貧
乏。口惜き事あり。是等。好んで貧乏。あ。あ
人あり。万能あり。一心万藝あり。一職。相違あり。万事ふ

主人夜四帛^{びらち}下^{くだ}帷^ゐ小水^{こみづ}を^を行^ゆぐんもくませる^ま圖



柳川信重

役み立を共家業の一ツきよけしむ。あまりのむくりふべ
 らに万能ある人の多くは我儘ありて。身上の事。妻子をや
 しあふ事ぬ。一向に役み立ぬ者あり。然らば藝へあく共
 めふく共。身を能おとめ。家業を出精して。家をとのへ
 家来けんぢくをよくや。あふの大上々吉の人あり。何
 まり万能ありて。何あもあも能用み立とりふ人をや
 しめる。何あもあも用み立とりふ人の藝み修
 り。智恵みむらり。山事をいと。むらなくとをして。家
 を失ひ身を亡がし。一家一門家来眷属追ふ。あんきをか
 ける者あり。右様の人世間あり。りくもあるりのあり。



主人度四節下帷小水を行べんもくませる圖

役ふ立む共家業の一ツとよけまば。あまりのりくりにふべ
 らば。万能ある人の多くハ我儘めして。身上の事。妻子をや
 一あふ事めん。一向小役ふ立ぬ者あり。然らば藝ハあく共
 めぶく共。身を能おとめ。家業を出精して。家をととのへ
 家来けんぞくをよくや。あふハ大上々吉の人あり。何
 まり万能ありて。何あもあも能う用ふ立とりふ人を不
 一かるたううた。何あをあも用ふ立とりふ人の藝いふた
 智恵ふやとり。山事をいこし。もるたくとをして。家
 を失ひ身を亡が。一家一門家来眷属けんぞく造ふ。あんぎをか
 ける者あり。右様の人ハ世間ふ。いくらもあるものあり。

然らバ何あもあも。用ふ立とりふ人をあまりや。あふべ
 ううた。唯正直ふ家業かぎを出精する人を好むべし。大十
 世界せかいを尋もとも。十分ふよき人ハ一人もあきとあるべし。
 一切の主人たる者ハ此儀をよく心得玉へ。万能があつて
 も一心が定まらば。取とりまりあき人ハ。万能も徒らと也。
 又万藝まんぎがあつても。家業の一ツがよくあつても。家をいてたへ
 妻子さいしけんぞくを養ふ事やしなが出来が。此故ふ無智むち無
 藝ぎよりハ大ひふあつてもあり。幼少せうより手習てしな字文じぶん諸藝しよぎ
 を習ふ。何の為ためかや。畢竟ひつきやう家をいてたへ妻子さいしけんぞくをよ
 く養やしなふ人ハ為也。尔る小妻子せうさいしけんぞくをや。あふこ

が出来ぬとありては無智無能より大ひおとるとある
也。是ふ舟と咄あり。川柳が幾句も○初づつを伊勢やの
まをまぐり通り。是の家業を一途ふつとめと身上をよく
まゝ人も初めのを扱置細魚のまゝもめつたふありと
香くもありめて御飯をたべるといふ人あり。其めりり
金銀の年々段々と殖も人あり。○二代目のりせやよびむ初
めのを。是は火くあざりの心が出来て。火く家業をよをも
見て。立花といふとい探を致し。初めのをも買中りふあり
たも。何うと物入も多くして。金銀のびがとーといふ人
あり。○賣居をわう中りてわく三代目。是は大おどりとあり

て来て。立花といふといの勿論詰ひ舞茶の湯等を上手に
去り。万藝のよけまども。肝心の家業の一ツがあらう故に身
上が甚だまろくありて。家来けんぞくを養ふことが出
来たり。此故に先祖の丹誠めて土藏作りふまるといひへ
を。賣居ふ出し。分散を在郷へ引ら。又ハ裏店へ引込んで。
後め紙くを買。わうあさの古骨買めでもあるより外に
手段あり。何れも至極といふべし。是ふありて。万能より
家業をよくつとめ。家を齊へ妻子らんとくをよく
養ふべし。其上めて。餘力あつた。人の藝を上手にまを
見て。樂らるとまべし。ま色の藝者ふあるふ及たす。藝

者ふあまは。必む身上の障りとある。身上の障りとある時ハ○藝か身を助くるやどの不仕合とある。是ふあまは。家業を出精して。妻子けんごくをよく養ふるよき事とあきとあるべし。妻子けんごくをよく養ふ内。礼儀も福德も安心も。一切の樂も皆其中にありとあるべし。何れどよい藝能があつても妻子けんごくをやあまはとあまはの大馬鹿大耻也。誠の樂とありふは。妻子けんごくをよく養ひ。家内和合して暮まを世界第一の樂とす。是を身分相應ふ養あまはとあまはの國家もよく治まらむ福德も安心もあまは人々此儀をよく弁へあ

家業の一道を出精して家を齊へ妻子けんごくをよく養ふべし。芝居角力物見拵奥もよく養ひたる上の事也。歌ふ○まきまの道の第一よくあまはを扱其外を鬼りも角あまはと此心をよくささるべし。若身上が不如意とあまはたる時ハ。飢寒の大敵あまはめらして。命ちあまはし。其時あまは親子離散あまは奉公あまは出る。又ハ乞食あまはあり外あまは。此上の大耻ハあるをくらふ。此儀を能く考へて不覺あまはかりあまは。あまはあまは。○名詮あまは。人一長あまは。事あまは。又一短あまは。事あまは。若一長を取らむ。一短あまはを求めむ。天

下ふ完まき人あり。昔ゆも一長を取て。其余を忘る。時ときハ葛くわ菟たの言といへども猶取づき者あり。况や名ある者をや。其失あるを以て。其失あき者を并あせし是を廢そせん事ハ。まどいあり。苟いちくも心を平くふあり。短を去り長を取時ハ。其益たる事大ひありと。法華經提婆品ほつわくの註しゆハ。鐘かねと抑おさくを以て鳴な。刀やいばハ磨こくを以て利と。金かねハ煉ねを以て精こ。梅うめハ寒ふゆを以て香か。むし。但たし其益を取とる其非ひを計からむ。子こハ乳ちをあましくあて母ははの醜みにきをそくしむ人ひとのくも物を取るふ。枝えだのまかりたるをきくはさるがごとく。とて人ひと。是人ひとの非ひを捨て功こうを取とるふたると。其よきを取とりて其あしきを捨置すてべし。

○闇路やみちの提挑ていせん燈とうハいそく。私わが主しゆ人にんハ無む理り人にんでつとままりませぬ故ゆゑふ。いとまを取とるふと思おもひませむ。堪た忍にんの修しゆ行ぎやうハ。主しゆ人にんの無む理りが直ありませう。答こたていそく。とあたる。主しゆ人にんハどのかりふ無む理りをいそくませうありませぬ。夫おとこども食た事じもあつむ。夜よも寝ねさせぬ。冬ふゆのさむいあも。とどろくおき。夏なつも蚊か帳やをつつむ。蚊かふくもせてあきませう。左ひだり様さまふ事ことハさぐるま。若も左ひだり様さまありや。外そとの奉ほう公こう人にんもつとまらぬゆへ。家け来らいハ一人ひとりもあひ苦くるむ。主しゆ人にんを無む理りと思おもひよ。とあつこの無む理りを先まへ直あさる。とあつ。

三行凡行五卷下

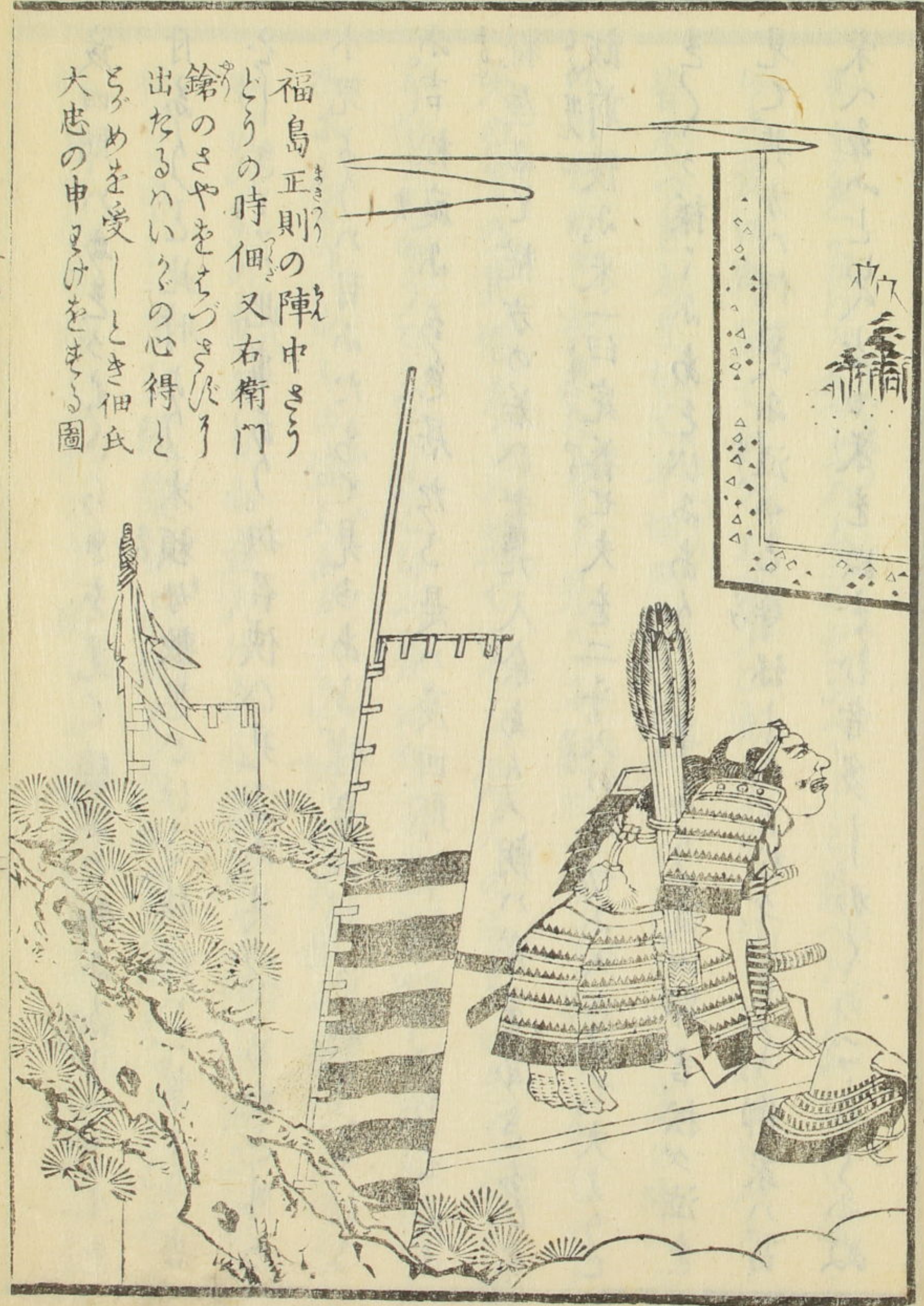
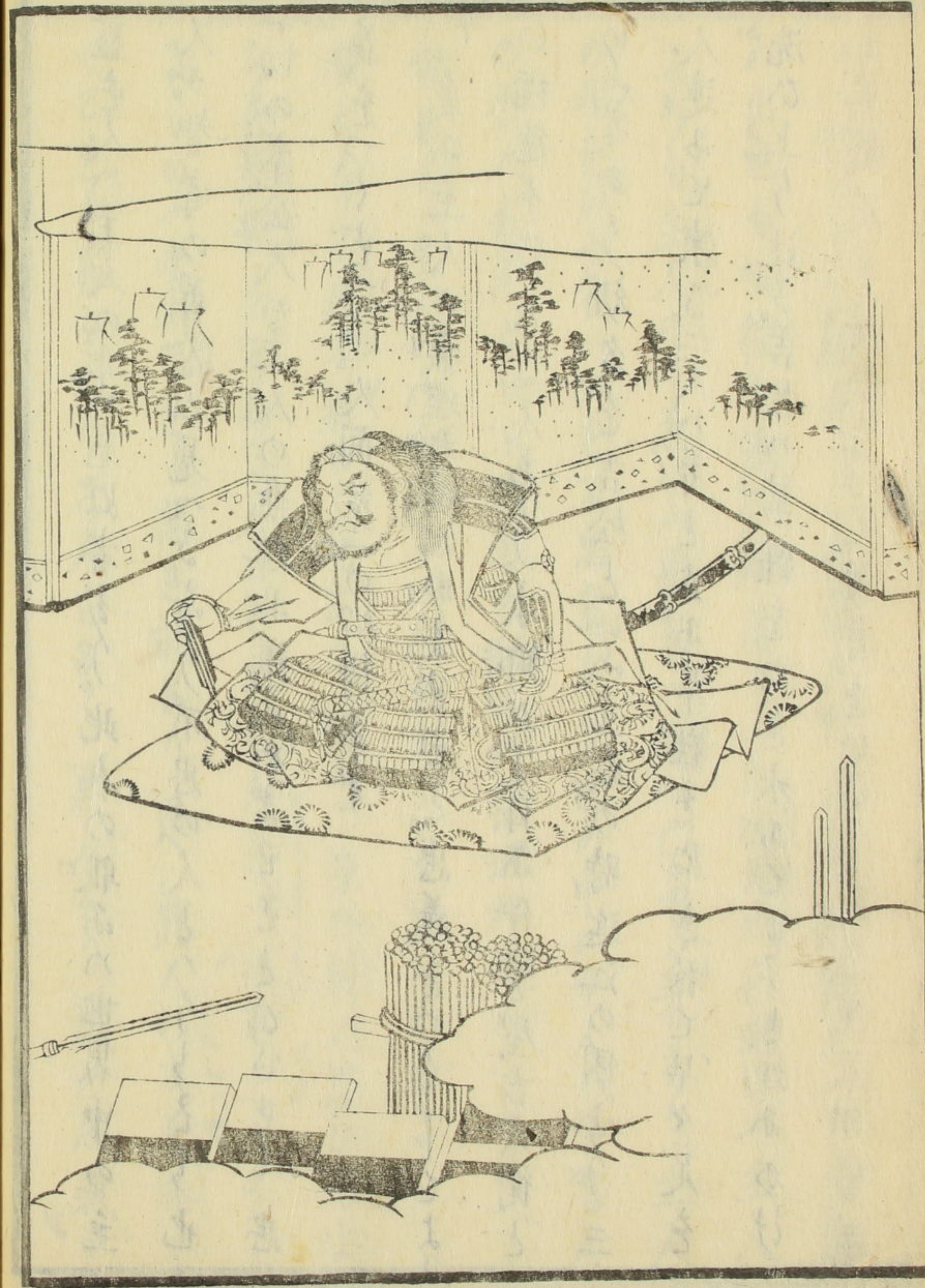
三

あり。其家来々あつても。其家の随分と立派りつぱ立たまはせぬ。見かざらまて。家来の身の立たぐここ。かかり事ことをあらわして。此内このうちでいあまが居ゐらねば。用もちがたりぬ身上みみが立たやうぬと思おもふの大おほひあるらうたへ者ものあり。是こゝとりふも人の人ひとたる道みちをあらぬ故ゆゑでござる。こゝろこの主人しゅじんのいふをいふ心こゝろもあく。何なん卒そつ身をよよくあまめて。未いま々々を家持かぢもあつて。やう思おもひ。氣きふいらぬ事こともいひまはせ。さまは主人しゅじんの眞實しんじつでござる。こゝろが大おほ不ふ実じつでつとめぬ。い故ゆゑふ。いいとまをさうふと。いいとあつて。大おほひあるあやまりあり。其そのあやまりを改あらめて眞實しんじつふつとめ

さつあやま。親おやへの孝行ここう主人しゅじんへの忠義ちゅうぎ其身そのみの仕合しあひ此上このかみにあるべし。狂哥きやうかをよよくまはせ。くくらうらうささ川がはあやま。○捨すてて行ゆ主しゅより先まづへああのの身みののままををあらぬ。人ひとのの者ものと此道理このこと不ふ相違さうゐあり。一切いっけつの家来けらいたる者ものは。主人しゅじんの是非せいひ善惡ぜんあくをううへりへとむ。只ただひひここままらら忠義ちゅうぎをつつくく。其その余あまをいいままはせたるが如ごとくくふふままべべ。左ひだりままらら福徳ふくとくの十じゅう分ぶんも北きた分ぶんも来きるべし。其そのあやまりあやまりここあり。次つぎ下したああままよくよくあるある。所詮ところ主人しゅじんの無理むり非道ひだうを見みて。彼是こゝとといいふふのの例れいは。不忠ふちゅう不義ふぎ者ものあり。主人しゅじんが無理むりいいふふららして。忠義ちゅうぎのつつくくせぬといふあり。世界せかい中の主人しゅじんの大方たうほう無理むりいいふふ人ひとあり。然しからら何なに

所へ行ても。忠義をつくと。徳き所あり。忠義をつくと。縁
 へ出世も。福德も来る。期あり。一生理没也。無理いふ主人
 よりも。主人の非をいふ。蒙来ハ先へ亡ぶる者あり。主人
 の非をいふ者ハ。必む不忠者あり。世の中の主人ハ。皆智者
 の善人あまども。不忠者の眼めハ。無理非道の人と見へる
 者あり。主人ハ十分ふよい人あまども。悪人ハ。見るくいふ
 者あり。不忠不義のくせあり。歌ハ。身の料ハ。思ひもよ
 らむ。主親を。そある人こそ。あるまあり。いふと人を
 る。いふ者ハ。己まが悪き故あり。是ハ悪人の友を拵え
 て。己まが罪をわく。さんとまする。悪人あり。誠の忠義を

盡き人ハ。主人の非ハ見ぬ者あり。此人の眼ハ。世界中の主
 人ハ。智者の善人と見へるあり。不忠の人と。いふら。くも。也
 一切の奉公人ハ。主人の無理非道ハ。あまどもと。いふま。忠
 義をつくと。べし。人間第一の心得あり。
 ○爰ハ主人の無理非道ハ。あまどもと。忠義をつくと。よ
 い。福德を得たる人あり。本郷五丁目ハ。伊勢屋吉兵衛と
 り。の者あり。幼名を吉松といふ。十一歳の時。近江の國より。三
 人連ぬて来る。二人ハ。着と直ハ。草鞋をぬぎ捨て。早々足を
 洗ひ上りける。吉松ハ。草鞋をぬぎ。水あてま。き。垣ハ。あけ
 て。其後足を洗ひ。上つて。目見をい。け。主人伊勢屋



福島正則の陣中さう
 とうの時佃又右衛門
 鈴のさやをさづき
 出たるいづくの心得と
 とめを受しとき佃氏
 大忠の申しひをまゐる圖

彦四郎ハあまがもろこらきを見て。後ハ物ふあるべき生き
付ありと此時より末頼母敷思ひける。梅檀ハ二葉より香
ちきとハ此事あり。叔召使ハ見るふ其つとめあそ外の
小児よりハ。目ふたちて見ゆ。ある時彦四郎庭廻りあける
ふ。吉松庭ふあき居たる。是ハ彦四郎本郷臺のちぢんの
糞屋あて。糞方の若ハ者凡人余あり。朝ハ糞をあきあひ夕
飯前後ふ。米一臼宛舂せ。夫を二斗入の半切ふ入させて。夫より已
ましく様ふあまびふありく事あり。彦四郎吉松が泣を
見て。其方ハ何あふ泣中と尋ねふ吉松が泣く御家の富
栄へあふといへども。米をぬまむ者多し。わくのぐとくふぬ

まあまあり。身上ハ今ふ亡ぶべしと思へ。うあま候と
りふ。彦四郎聞て。何ぞあまうとあり申とりふ。吉松が泣ふ
皆米つきあまうて。半切の中へいあま。ひそくふ米の中へ大
の字をあきあきためし見るふ。朝ハ大の字過半あくあり。
大の字の其怪あるハ至て火し。是人の手をいきて。盗み取
りしあまうとありといふ。彦四郎も器量ある者あま。大
ひふあまう。火くの盗人ありとて。何ぞ其様あ衰むと何らん
や。りぐまの家あも小盗人のある者あり。併し汝ふ米奉
行を申し付る間。隨分と盗まぬやうにまべしと。米奉
行をいひ付たり。夫より段くと成人まると隨て。あきあひ

も此人の者共よりもよやくいしける。外の者共ハ一朝ふ百五十文宛。もあけらるふ。吉松ハ三百五十文宛りあけらる。是ハいふある事うとしふ。朝七ツふ起て糶を一荷持出芝辺へ行て賣拂ひ。此利貳百文叔帰りて。又神田辺へうりふゆき。人並ふ百五十文宛儲ける。主人の徳用いしくなくうあきか。一。彦四郎の所の福の神あり。彦四郎も吉松かつとめかたを感トける。吉松十八歳の時心底をくらんと思ひある時。外の者どもあり。あそく帰りけるふ。朝飯も喰せむ。み水一荷汲来まといふ。此水ハ御茶の水。火消屋敷の下堀堀端ふある井戸也。此井戸ハ享保十三年九月朔日大水の節御堀より本郷五

丁目より汲来る。一荷汲て帰ると。次手ふ今一荷汲来まといふ。申も。吉松思ふやうハ外の者共ハ皆く先へあへり。朝飯もたべ。たをを吞て居るふ。其者どもあハ申付むし。日暮み申一付るハいふある人の使ひやと思ひける。又一荷汲来る。迎りの事ふ。今一荷汲来まといふ。そとで吉松大ひみらうと。是ハ我を責らうさんとの仕方あり。是非もあ。今日只今追の命ありと思ひ定め。小石をひらいたもとみりて。入水せんと思ひし。いやくまてあぢ。やうぢいのさんだんあて。あやうあうきめふ。あまもありかこ。然も水を汲てうへり。其後いふやうともあるべしと思

ひ直すし。水を汲て帰りけし。彦四郎殊ことの外よろらび。下女
 共みりひ付て。足をあつらひせ。爰へきこる。登のぼりし。彦四郎
 が前へよびよせ。衣い賞あきを着き久ひさきせ。袖そでの小こ袖そで一重帯等も。よ
 きを結むすむせ。其方その喚こゑひびくるべし。我も其方を待て。朝
 飯あしもたべむ。居たし。鯛たいていのやき物もの採との料理りめて。相伴しやうはんを
 申し付。たゞ終りし。九人の糺とと方かた着きひ者共を呼よせ。彦四郎
 申し渡しけり。今日より吉松事吉兵衛と改名致し。糺
 方の番頭を申し付るあり。不足ふそくふ存ぞんむる者ものあり。いとまを
 取りて出む。又吉兵衛よしへいゑの九人の者共ものども。心次第こころしだいあり。と
 まるべし。心ふ叶こころむる者あり。我等われらも聞きふ及およむ。いと

ちのをつらむ。万事其方その心こころ仕しせたるべし。と申し付
 たり。是則まづち吉兵衛よしへいゑの主人しゅじんの無理むりふあまむ。とよく働はたら
 けり。堪た忍しのむつよきより。あつる幸さいひを得たり。扱あつか吉兵衛よしへいゑの三
 十の歳とせ迄まで。糺とと方かたの番頭ばんとうをつとめ。後のちの商あきなひ番頭ばんとうも兼て。
 つとめける。又次の者そのの障さわりも。あるべし。思おもひ宿しゆく這入こゝろ
 の願ねがひを出しけし。早速はやすみふいとまを下くださ。久ひさくつと
 めたり。とて。金三兩かねさんりやうく。と。北きた年ねん余あまもつとめたる。金
 三兩さんりやうぐ。いく。と。彦四郎ひしやうらうがつらへ。おつて取らぬ
 者多し。是こゝろは。と。ふ。あ。の。と。も。取とり。が。と。然しかる。ふ。吉兵
 衛よしへいゑの左様さやうを事ことへせぬ。堪た忍しのむつよき男おとこ也。あり。か。と。存ぞん

まをとりかて。是をとりかいたり。夫より同町親分乃
 天野屋長左衛門とゆふ。年寄の方へゆき。私儀も彦四郎めを
 を首尾能つとめ。ゆきとまをゆきい申し。只今迄ハ大き御
 世話相あり。ありがたく存ト奉り御礼おまひりい
 とゆふ。長左衛門聞て先ハ目出た。彦四郎ハ何とこれ
 たるかと問へむ。金三両と申しゆふ。そをえあん
 まり火。あせ三両とゆふ。つとき。彦四郎かつ
 へ。ふりばけて取らねばよいゆふ。ゆき。御主人の事
 あまを。主様ゆふありか。何でも思召次第少しゆら
 らしと云ふ思ひ不申ゆふとゆふ。夫ゆふとゆふ。九年余も

首尾能勧めたるゆふ。せめて十両二十両ハよと云て裏店で
 も借て。出商ゆふゆふ。様ゆふ。仕ゆふ。お者おゆふ。ゆふ。吉
 兵衛申ス様ハ。此方ゆふ。役ゆふ。立ぬ所あり。十分の用ハ勒
 まりか。夫故の事あるべし。何でもゆふ。御主人の思
 召次第といふ。火も恨む心あり。長左衛門申るハ我等
 も何ぞ遣べし。財布を取出し。是ハゆふ。家ゆふ。夥
 く金子の入たる財布あり。是を遣ゆふ。間。随分と金
 をゆふ。末ハ繁昌まべし。金壹分ゆふ。遣ゆ
 ゆふ。吉兵衛ハゆふ。トけゆふ。由申し。都合三兩壹分の
 金子を紙ゆふ。幾重も色。彼財布ゆふ。入て帰る。叔吉兵衛

彦四郎居宅のむらふ。九尺二間の明店をわけて。割いたを
 こをうけて一人くろくぬ。其内ゆも折却の彦四郎の機嫌
 をうらふひらる。随分とあきあひ上手あきば。人より余計
 ふりうけらる。扱二年もまどいて。彦四郎吉兵衛を呼んで申
 一けるやうに。其方も今の通りみてハ相濟まじ。我家のあ
 らびふよき屋敷を求め。見世を出て登一と思ふあり。其
 方まいりて番頭をつとむべ一とりふ。吉兵衛並々の者
 あり。廿年あまりもつとめたるふ。基手金もくまざるハ。
 むどき主人あり。何とて番頭をつとむべきや。然るより吉
 兵衛申を申りハ。いうさま一人くろくぬハ。甚ど不自由ふ

まづまいりる。登きとて借屋をままい。彦四郎の出見世へ引
 らうけける。金五百兩の家屋敷。金千兩のあきあひ仕込と。
 外ふ元手金とて五百兩。都合二千兩是を其方ふ任せ間。
 よくあせきて年々ふへる。申りふまべ一。勘定ハ我み見まべ
 一。又妻もあくとあるまじとて。相應のととより妻を
 迎へける。扱盆暮あハ金子ののびたる帳面を見せけをを。
 彦四郎大ひふよろこび。手柄く其金子ハ其方の物ふい
 一置べ一と申一ける。扱彼是と三年もくろくぬ。申りふ。
 彦四郎大病あり。吉兵衛ハ晝夜寝食をまよとて。看病怠
 たらむ。療治手を尽まるといハ共。其印一見へか一。又信心

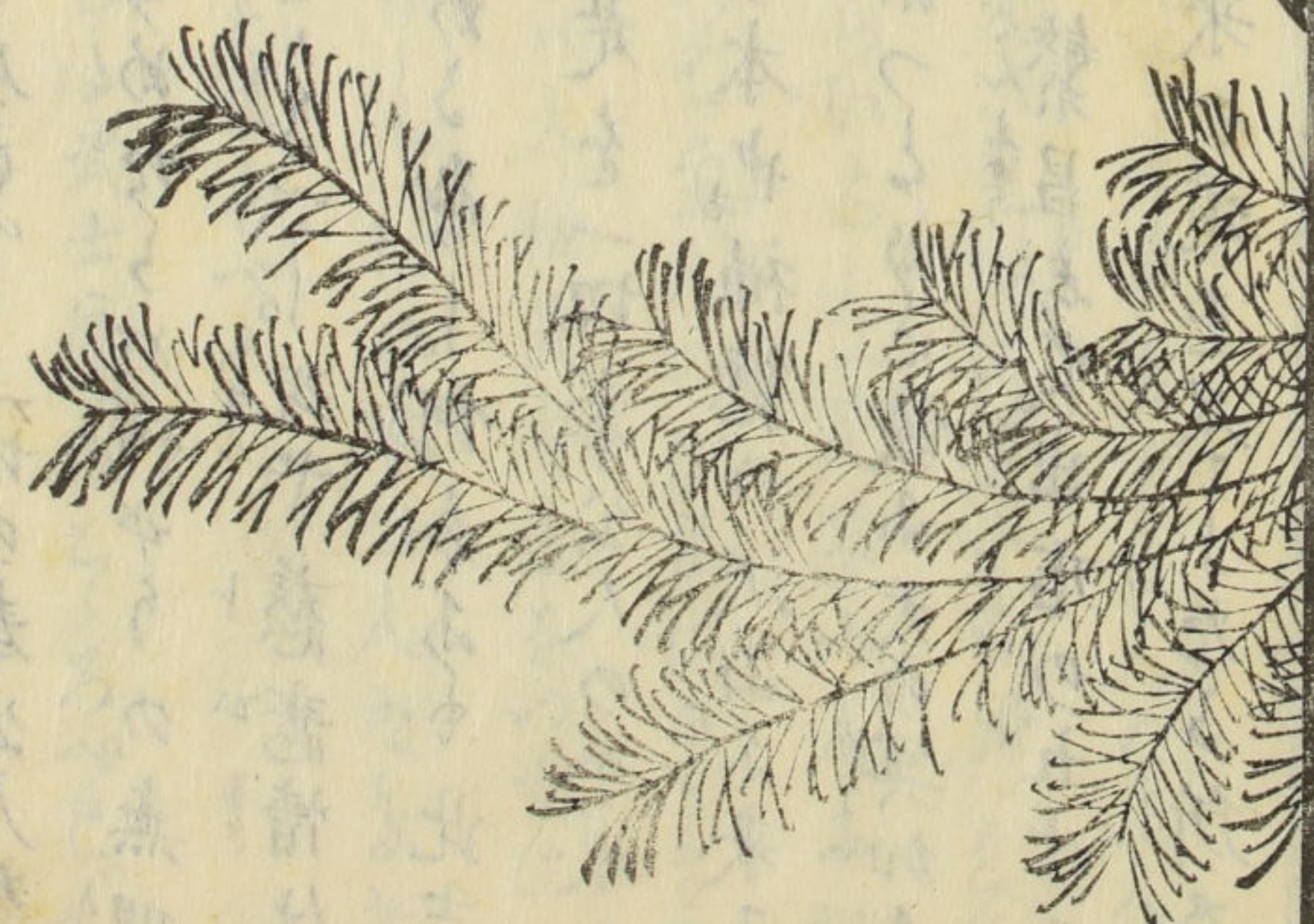
をあら佛神といひのるといへども。老病難治の症あり。此度の
 必死と見へたり。是ふよつて彦四郎も末期ふ及び。吉兵衛
 其外一家親類子供等を呼集め。申しけるやうに。吉兵衛事
 の幼年よりつとめく甚たよろし。此方より無理をい
 ひくけ。無体な事もいへり。たゞも火しも心ふくけ。ど
 あそご堪忍ありか。さきとを辛抱あり。あつとめ
 たり。其やうびとあり。今逆預け置たる。家屋敷の勿論仕
 込物。有金等残らむ。吉兵衛に遣はし。間皆々左様。相
 心得て。吉兵衛と申す。暮し万事。吉兵衛に相談あり
 世の中を。鹽梅よく渡るべしと遺言あり。正念ふ命終せ

り。叔藥式等も福んごろふり。中陰の佛事年回等も
 丁寧ふり。とありける。叔吉兵衛が器量ハ主人彦四郎
 よりハ。又々抜群の英雄あり。夫より段々と身上をよ
 くり。大金持とあり。商賣を手廣くり。手代共
 多く使ひける。ある時よく奉公をせし。手代上州へ絹
 買出し。金三百兩持せし遣はしける。道中ありて女郎を
 買。ちくち探あり。三百兩の金子を皆失ひたり。夫より直
 ふ欠落あり。行方あり。余の手代共申しける
 ハ外の者への見せしめあり。急度ちんご。孔明を
 申しと申しけるを。吉兵衛申すやうに。あの者は是まづの

奉公中々よ〜つとめたり。是ふよつて五百兩ハ遣はさんと思ふ所ぬ。三百兩失ひて欠落せしハ残念千万あり。兼て墨のきんと思ふよりのハ。二百兩不足ありとて行衛を尋ねて金貳百兩持せしきりけり。外々の主人ありよひさいとひあ〜。二百兩の金子ハ中〜。然るふ吉兵衛ハ左様お不埒者ふ跡より貳百兩持せ遣はさ〜。ありがたき心あり。残りの手代共是を見て。未頼母敷思ひ。夫より後ハ一人も不埒者る者もあ〜。皆神妙ハ家業を出精志て俱々ハ主人吉兵衛の金銀をふや〜益々繁昌の〜ける。吉兵衛ハ家より出たる。伊勢屋とのハ五十三軒あり。

二百兩を捨て跡々の手代共ガ心を引立〜。誠ハ町人の英雄一騎當千の勇者あり。年々〜とて跡ハ絶た共。其出店ハ今ふ方々ハあり。世もあ〜がさき人といふ。是非義非道の主人を眞実ふ。〜何やりの無理をいひふ〜。無理を仕ふ〜。夫ハ火〜。堪忍をよ〜。よく辛抱あ〜つとめたる所の福分あり。是ふよつて主人の仁不仁ハあ〜。唯一向ハ忠義を〜。主人を大事とつとめあ〜。天より福德をあ〜へ給ふ事眼前あり。た〜ハ主人ハ何やりの無理非道ありと。

きりふ鳳凰松ぬ鶴今時聖代泰平ぬ
治まりて戸ざぬ御代の圖



夫あは少しゆのまじりて。よく堪忍をいと。何所まじりて
よくあんがらんとて。眞実な忠義を尽まべし。一切の奉公人たる
者ハ。此吉兵衛の中りふ心得て。つとめたらば何中りの。無理
をいひまふ主人たりとも仕へ安うるべし。況や慈悲情け
ある。主人ふおいてん。猶更仕へ安める。何分あも此吉
兵衛の中りふ。心得てつとむべし。是を一切奉公人の手本と
まべし。辛抱堪忍ハ諸願成就の本也。福德の沢山ふ来る
道あり。此吉兵衛ハ忠義一途ふつとめと故ふ。天の冥加ふ
叶ひ大身体をりらひ。彌々益々繁昌とて。出店の五十三
軒もある中りふあり。家来の道を尽したる所乃

福分あり。若又主人の仁不仁を見て。忠義をまゐる人ハ主人の
仁なくして。忠義あまば先ハ主従の道みち外とて。
忠義といひひが。他人ありらひあり。是等の人ハ福
徳あり。主従の道あり。是ふよつて主人の仁不仁ふら
むと。眞實な忠義を尽まべし。未ハ大福長者とあつて。世の
中を安心ふくく。一切の奉公人たる者
此儀を篤とあつて。厚く忠義を盡まべし
○武道初心集下ふ奉公をつとむる。武士第一のつとむる。主
君たへいふと無理非道を仰せらる。いふ中りの御あ
りふ預り候共。恐入て御意を兼り。迷惑至極の休を

致もなす。たゞ主人より其方あやまりあきおありて
申し開きを仕せあど仰せらる候とも。直々申
訳あるの御言葉をおへまこと申して。主従の作法又違
ひ大ひある無礼大罪なり。然りとはいへども武士道のま
り共相成べきやどの義あり。夫ハ格別の子細あるを。其
時を過て家老用人探へ便りて。申開きの御取成頼こ入
等の事ハあくて叶はざる義あり。是れお付ても主君のお
ことどもやむふあはる。其身の一分も相立候かりふあ
あき御諸答へ申上べくい。夫れお付て古き武士の事を書
あるし申候。慶長年中福島左衛門大夫政則の家来お佃

又右衛門と申す大剛の士あり。在陣の砌り夜中お政則の
陣中お不慮の騷動ありて。家中の諸士残らむ本陣へおせ
あつまる事あり。其翌朝お至り政則又右衛門お對して。其
方夜中さうりどりの刻に鎧おさやをあげあがし持出た
るのいふの事を。御尋ねありけむ。又右衛門承り御
訳のおむき。御尤お候。昨むん方より以外の外。雨天お付
あまさやをあげ置候を其終持出候。然るもさやを
あげあがし持出いと御覧遊むとさしたるの御尤り奉
存候と。申上げむが政則扱へ聞へたりと御申有てあ
濟けり。其後傍輩衆又右衛門お申けるハ夜前其許

儀ハ鎗やりのさやをむらりて持出らるるをりぐまゆりて
 見届まかけ罷在まい幸さいハ證人しょうにんもあまは。今朝御尋あさの節ふし雨
 さやをうけ置おはとの御請ごうハ一圓心得いつげんこころがごとくとたゞ縁ゆかりけ
 多おほく又右衛門みぎゑもん聞きてあまはさやの儀ハ各おの方かたも御存ごぞんトの
 通とほり油紙あぶらし一重ひとへの事ことふはへとぬき身の鎗やりも同前どうぜん也なりうり
 とめめも大将たいしょうの御目ごめが縁違ゆかりちがひとあるハ重おもき事ことあり
 爰こゝを以もつて右みぎの通とほり御請ごうふ及びおよびいと申まをしは。是こゝを兼あ
 る諸人しよじん又右衛門みぎゑもんが心入こころいれのやどかんトけるとあり。自今より
 以後いごととも主君しゆきんの御側ごそば近ちかく御奉公ごほうこうをつとむる武士ぶしを
 其心得こころとらあててハ叶かなはらざる事ことあり。初心こころいの武士ぶし心付こころづの為ため

仍なほて件ことのどととあり此こゝ又右衛門みぎゑもんがごとく心得こころとらてつ
 ふべき事こと本道ほんどう也なり

○叔しよ孟子せい齊せいの宣王せんわう主従しゆじゆんの道みちを説とふ事こと。又捕とらの家
 訓よ豫讓よじやう等の事ことハ主人しゆじんの心得こころとらを申まをす事ことあり家来けらいの道
 ふとづきたる共人情あひなづかりハ又かくのらとさきの事こともあまは
 向むかふ筋すぢあまき事こととハ思おもふべからず。主人しゆじんの仁惠にゑ薄うすりまは自
 然しぜんと忠義ちゆうぎも薄うすくある事ことあり。又仁惠にゑ薄うすき人ひとハ其外そのほかハ
 由よしありき事ことあつて忠義ちゆうぎも思おもふゆりみ尽つしがこき事ことを
 あり。是こゝ主人しゆじんの使つかひやうふよつて。忠ちゆうめも不忠ふちゆうめもある
 事ことあまは主人しゆじんの使つかひやうも大事だいじあり。主人しゆじんたる者ものハ此

道理をよくあつて家来を我子兄弟同前か思ふべし万事
慈悲情けあつて道か當るやうに使ふべし

○又主人の恩恵使ひやうに上中下種々無量あり家来の忠
義あも上中下種々無量あり一かいぬひかごとし此主人
の不実あも末頼母しあつてと思ひ主人の仁恵あも
あつて奉公まぐる事もあり又主人もあつて不実者あつて
大事の用も頼まかごとし折もあつてひまを遣はさるべしと
思ひて使ひ居るもあつて千差万別あり一かいぬ思ふべし
む孔子已ぬ見行可の仕へあり。際可の仕へあり。公養の仕
へありと。孟子も見へたり。見行可の仕へたり。道の行か

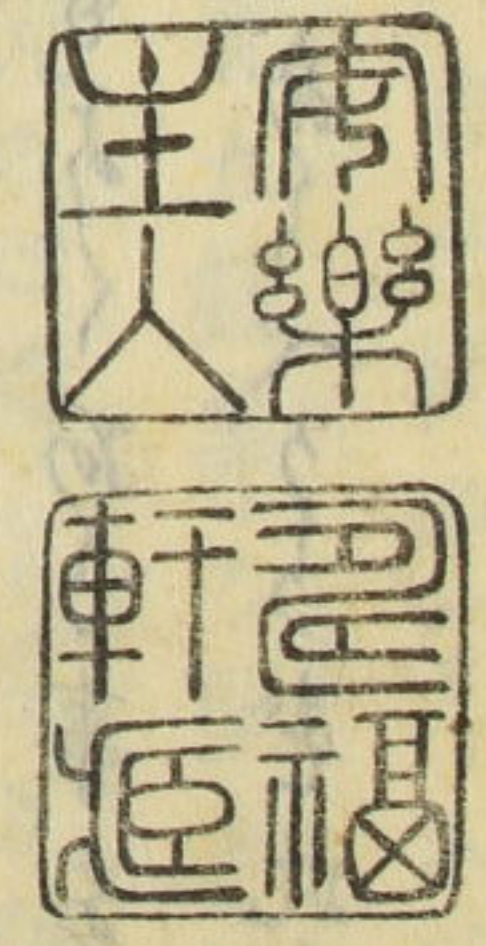
まぐるべき兆しあつて故に仕へぬ事あり。又際可の仕へ
りぬ。主君交るぬ礼を以て敬ひぬ故に先留まりて仕へ
ぬ。又公養の仕へたりぬ。主君より賢者を養ふたま
りの何る故に仕へて居ぬ。然るども道の行かぬ時
は去りぬ。孔子も事あより。時あ臨んであつてのどき此
仕へあり。いも人や其餘の者共のいろく様々の仕へや
苦とあつるべし。又抱関撃柝の仕へあり。是は道路の関門を
守り。柝木を打てまぐる役也。是は忠義を尽し道伐む
あも人が為ぬあつて。貧乏故に妻子を養ふ人が為り。
奉公まぐる也。主人あも色々あり。家来も色々あつて

主從心得五編下
五

弘化四未歲六月吉祥日

東都下谷金杉

安樂精舍真鏡著



主從心得草初編二冊

同 二編二冊 日用心法鈔初編三冊

同 三編二冊 同 二篇三冊

同 四編二冊 同 三篇三冊

同 五編二冊 同 四篇近刻

書林 江戸下谷廣德寺前 和泉屋庄治郎





鳥田藏書

